



陸正裁編

国文  
特別図書  
1965年度

貴重書

国文  
24L  
154  
4 3



降為交子なるる 後校 秘 西

荒州氏中よむさしきり 少郎 凡

仲少共強しきぶふらう 少郎 凡

書らちゆううろく 怪山 其 落 凡



40. 8. 26

ア306531

神の代あり陰陽和合の道と射合時生と 晒落天竺少の菩提薩埵以菩薩と  
略も淨屠氏の晒落唐國の莊周も言まこと知ると寓言者少て多きと 嘲心  
世双渡ふ時代僕も江戸の生息友にそやきとまんふ馬鹿ふふら  
も。 頓智京傳柳亭馬琴妙ある作の多けれど書て雪麿や三馬  
カ述と作意はまのくの醉作明さぬ夜半もなり。 晒落かこりじと  
謔言は斜又守る梅の木に彫つけく一ヤ下待たり版木み彫るの  
木でこりまへへやとも兼和梳久の物狂ひ志やう。 是も矢張木達トヤ  
年々み高くかろのの鼻をかり木の葉天狗の爪の先

作者の喜似とく人の員双  
くらんことと

林屋の正藏坊 契



大星由良之助守本尊

大星由良之助守本尊  
 兩柱將景のむね代  
 手子とつて將軍さのちかひます



香車の流一枚つき

香車の流一枚つき  
 香車ひんるといふも  
 手子とつて將軍さのちかひます





光悦の書  
 乃具たのりて大里中使の故命がてまふ  
 下におまはるまはる九  
 別てまはる  
 光悦  
 一あまふふふふふふふふふ  
 光悦の書

光悦の書  
 光悦の書  
 光悦の書



里見義實の陣太鼓

是の小かざりて壱所の太鼓  
 そのむり安房の里の住人  
 里見浩毅太史義實の  
 侍女おまんといふ人の  
 わりかざりて壱所の人  
 おまんといふ人  
 油のるん小水  
 するるるるるるるる  
 こりそ太史義實の太史義實  
 光悦の書







大田で  
 延々  
 友徳の命を大田へ奪て  
 大田を清くその皮を  
 曲京  
 世のひびき  
 海峯の志ありませう



義経大田に  
 大田を清く  
 世のひびき  
 海峯の志ありませう



徳金の落も落しつゝ周煥  
 多くあの中ゆもここ小  
 建長寺の  
 霊  
 あり  
 あり  
 徳人祥集  
 一七并  
 合くすつらあふ  
 長きの上下  
 下ゆくと徳人あしあ



工とせせたをひと  
 一とあり都くもここ  
 あらみ清和源氏の  
 正統六孫王経基公  
 より十五代の後清  
 左のの歌義  
 相  
 建久の手  
 將軍と





新正 正月十三日 小正月  
 頼朝公の御時、おまがはるる味と  
 基のうの 羽二重のふくこ  
 けふの男、けふの女、けふの  
 朝さぬのか、けふの朝さぬのか

頼朝公の御時、おまがはるる味と  
 基のうの 羽二重のふくこ  
 けふの男、けふの女、けふの

一節 赤穂忠臣経

大序 鶴岡將軍社 泰鹽谷  
 御臺 兜見分師直 惠羅惣  
 桃井 口論 鹽谷 挨拶 段切  
 第二 段 白丸 弥使者 小浪  
 戀慕 桃井 立腹 本藏 松切  
 而加 計出 壽

仁田 義貞の  
 めさうす 祈の 籠がらの  
 けふの男、けふの女、けふの



仁田 義貞の  
 めさうす 祈の 籠がらの  
 けふの男、けふの女、けふの



第三段目勅使饗應師直  
 出仕途中賄賂種々金銀  
 沢 伴内仰天師直追從  
 本藏公何之角之饗應拜  
 見同道桃井出仕師直段  
 段 訛伴内御脊中河野加  
 野追從其次塩谷出仕御

波平行安と  
 一  
 波平行安と  
 一  
 波平行安と  
 一



臺挾夜衣返事師直肝癢  
 前躰塩谷大名尔似合奴  
 内義之返事自身持叅少  
 不念殊尔今日者勅使饗  
 應 三日延多羅能多之  
 蛇師直燒無茶井戸之鮎  
 比利比利段段惡口塩谷



守  
 本  
 尊

波平行安と  
 一  
 波平行安と  
 一



短氣短刀拔而切付而壽  
 加喰多是茂切付寸仁突  
 多病加能多蛇

第四段目石堂上使山名  
 悪口大星出仕遅加津多  
 御臺愁家中華禮叔々而  
 氣之毒段切

第五段目勘平鉄炮場定  
 九郎真黒死駄懐中五十  
 両勘平志目多人於殺而  
 金取而天之與登和味伊  
 事言於畱勘平猪從先逝  
 第六段目親父死骸持参  
 婆様立腹勘平財布見而

鉄炮除の守ハ是より出まん



天の與の此金有難猪之掛物  
 猪の守るべきは是れ猪の掛物  
 此の金の守るべきは是れ猪の掛物  
 此の金の守るべきは是れ猪の掛物

持由のちくわつ  
 勘平が如く  
 勘平の如く  
 勘平の如く

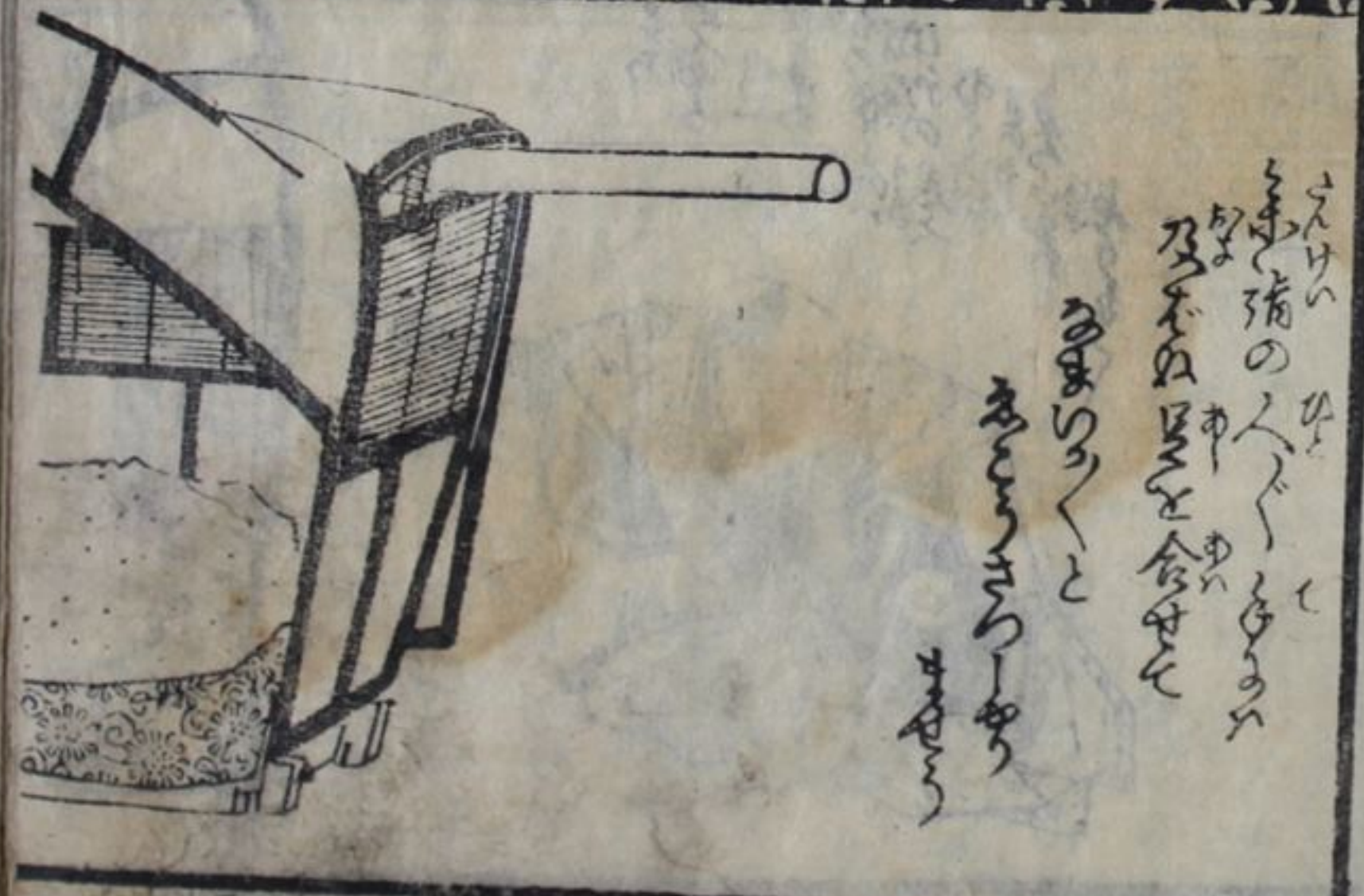




無返答切腹而士死體見  
 而怖少不念勘平本望血  
 判兩士財布懷中五十兩  
 第七段目力跡使者御臺  
 書狀大星内見鈎燈籠而  
 讀憎於輕茂二階加羅讀  
 憎九太夫茂椽之下而讀



憎三人乍何賀書而有多  
 作者計知難多  
 第八段目道行旅路之嫁  
 入大名之行列見而曾奈  
 多之嫁入茂阿野様仁仕  
 度登和五百石之倍臣仁  
 和少虫賀與井





第九段目親子賀長之旅  
 無事而着於林賀取次娘  
 賀盛仁看嫁入賀伊茶附  
 表之虚無僧賀胸惡力弥  
 賀鎗而突障子賀場多附



第十段目義平旌疑捕人  
 仁略而荷物之長持捕多  
 捕多登近所江開江而大  
 木奈仕合近所仁知多羅  
 敵討和出来間井  
 第十一段目夜討之銘々  
 搦矢而門打時打夜巡取

是るるがどののちの石人  
 女九代室元天皇の御  
 相補の形よ大伴の授  
 ののわじが彩羅屋の軍  
 とて唐土へさつる事  
 さま姫小口を住み  
 仲よわたりそ耐さ  
 夜の帳をあけて  
 あさかかろし  
 せを  
 一ん  
 切り  
 それ



得而繩打歎賀隱而皆々  
 氣尾打矢間賀見附而塔  
 堂首打悅淚之波打皆々  
 手尾打登手加羅頓々果  
 大鼓打一説赤穂忠臣經  
是れが本乃

南具佐弥陀南具佐弥陀

林屋正藏作

備内ごころ

備内ごころ

おのれをまじりかきよの  
 とされひとりよかあかこの内ゆて  
 石とあるれさうゆるの助かさび  
 かきよのさめいよあはははまは  
 せとささるまじりかきよの  
 べきせんひあうありゆきんぐの  
 此方のゆきんぐの川のあざろ  
 すいとおがらさきませり

夜光乃ニツ玉



夜光乃ニツ玉  
是れは夜光の玉なるを  
 備内ごころ  
 備内ごころ

あすあのを金をもちゆくとまらじりあ  
 のこたせはなほりやまらじりあ  
 びせなうめりあ  
 のこたせはなほりやまらじりあ  
 びせなうめりあ  
 のこたせはなほりやまらじりあ  
 びせなうめりあ

あすあのを金をもちゆくとまらじりあ  
 のこたせはなほりやまらじりあ  
 びせなうめりあ  
 のこたせはなほりやまらじりあ  
 びせなうめりあ



このころ小敷ひきまきつら極やこいせ  
 修ま金の法布がまの由地こ  
 けりんあやうとん  
 志くこのねまきに  
 浴地あまの志き  
 天竺の由きいあな  
 備法と志のつかんのちや  
 志やうとかなしりきあう若のねま上人  
 由きあまの目物連中がうさのけ  
 みのてまこと小い由地の四十弁や  
 弁あ金弁と百あ百々月ひあ供  
 中法まのせあ入るあ教の世の中  
 志くこのねまきわこいせの志くこのねまき



納外の  
 海外の  
 市江の  
 白旗の  
 切す  
 ばさ  
 まさ



志くこのねまきわこいせの志くこのねまき  
 志くこのねまきわこいせの志くこのねまき

志くこのねまきわこいせの志くこのねまき  
 志くこのねまきわこいせの志くこのねまき

志くこのねまきわこいせの志くこのねまき  
 志くこのねまきわこいせの志くこのねまき



これ  
 是るる 妙の内の 稽の 権の 権の 権の  
 四十七人 志を 志を 志を 志を  
 守の 守の 守の 守の  
 日 十日 十日 十日  
 志んく 志んく 志んく 志んく  
 志の 志の 志の 志の  
 て 志の 志の 志の 志の  
 志の 志の 志の 志の  
 志の 志の 志の 志の



散酒宴道樂尊像

これ  
 是るる 妙の内の 稽の 権の 権の 権の  
 四十七人 志を 志を 志を 志を  
 守の 守の 守の 守の  
 日 十日 十日 十日  
 志んく 志んく 志んく 志んく  
 志の 志の 志の 志の  
 て 志の 志の 志の 志の  
 志の 志の 志の 志の  
 志の 志の 志の 志の



これ  
 是るる 妙の内の 稽の 権の 権の 権の  
 四十七人 志を 志を 志を 志を  
 守の 守の 守の 守の  
 日 十日 十日 十日  
 志んく 志んく 志んく 志んく  
 志の 志の 志の 志の  
 て 志の 志の 志の 志の  
 志の 志の 志の 志の  
 志の 志の 志の 志の



美酒勢如天のすなわち代仏あり 或ときこの長対長夜の長酒の夜  
 とありしはわりのち程ふらち紫りて宇頂天の昇り多の多くの酒を  
 二倍の倍のいひうけるも 拂々横々寐新 迦とありし  
 こまを怒りて捲ふ戸の多利の太長 酔とまの御をい  
 酔の池へおこさしそが元よりそとま 由縁あるれがあんし  
 日べいけえや乃くまじくとらぬ川へるまを 出て沈田仔丹の湖  
 唐去へりしり 竹まきに殺着湯せそまを 香沈夢白を  
 詩百編の念仏 念仏入るうづけ酒代の真加 海を  
 取のふそ後 宋の代よりして東大寺の泥田坊 云々めは け目の  
 軒へ由連中し 漸 多々の三多の院の 中 此代 幸大屋を ぬか  
 系 那 酒の 里に 住み 流 雨の 酒 屋へ 友 とも の 幸 大 屋 住 居 せ  
 つまき 中 蔵 子 流 一 酒 の 酒 宴 ぬ ぬ の す な わ ち 是 なる 瓶 の  
 よま 瓶 せ 毛 不 碎 てる ぬ い わ づ ち ま せ ぬ け ぬ



大食勘金足公御作

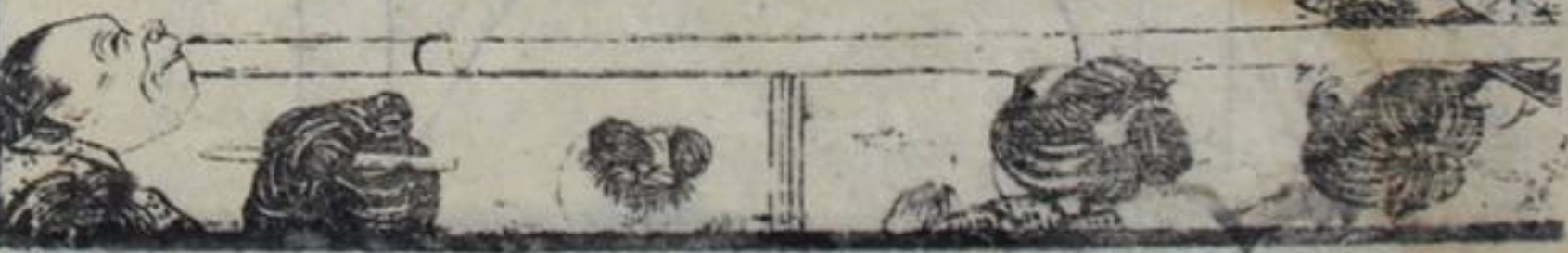
此の神はひまのりん 喰本  
 神 尊 身 の 事 考 外  
 此 神 尊 身 の 事 考 外  
 あり する 神 尊 身 の 事 考 外

此の神はひまのりん 喰本  
 神 尊 身 の 事 考 外  
 此 神 尊 身 の 事 考 外  
 あり する 神 尊 身 の 事 考 外

善徳の人とある  
 見あつての事



ついでにちりちりやまゝの板のたてをうへに掛り  
油のついでにちりちりやまゝの板のたてをうへに掛り  
通して板のついでにちりちりやまゝの板のたてをうへに掛り  
板のついでにちりちりやまゝの板のたてをうへに掛り



目の上をさへん  
此の公見ると大食の  
腹はあふりやまゝ

○酒宴如來の脇士小三せりぬの用運寺金満の守本分の限  
菩薩の善徳有り百妙丹の妙吹よしと別五沙上人の作  
右の巾着の土茶教の物の謎とちたりの巾着の地面様  
式の帳面をもち正念金二朱八片りて小判一両又換り入す  
銀一朱十六りて金一兩にあり貧窮する高利の割くも  
まぐりても然るくは借入りの苦者獅子と足下に志さぐひさう  
の喜も知させばとぬせのふんまじり傾城の掃かえりとの  
此佛と祈りて念の念と祈ひ二百両の念をゆきもひさ  
信んのかさまり金ぐ款の世の中の荒生と海をいりひさ  
福来とせんとのあがれぬせのふんまじり傾城の掃かえりとの  
まじり

○是るるの酒宴如來の脇士小三せりぬの外八文字菩薩の



十七年の頃庄司甚をうが  
 用基に北郭

中山寺依匠立則の  
 山内太夫の修あつ松の大木を  
 刻まじとせく山客の初まの馬前の



角美と  
 ありて  
 山客の  
 初まの  
 馬前の

**金魚不快之御玉**

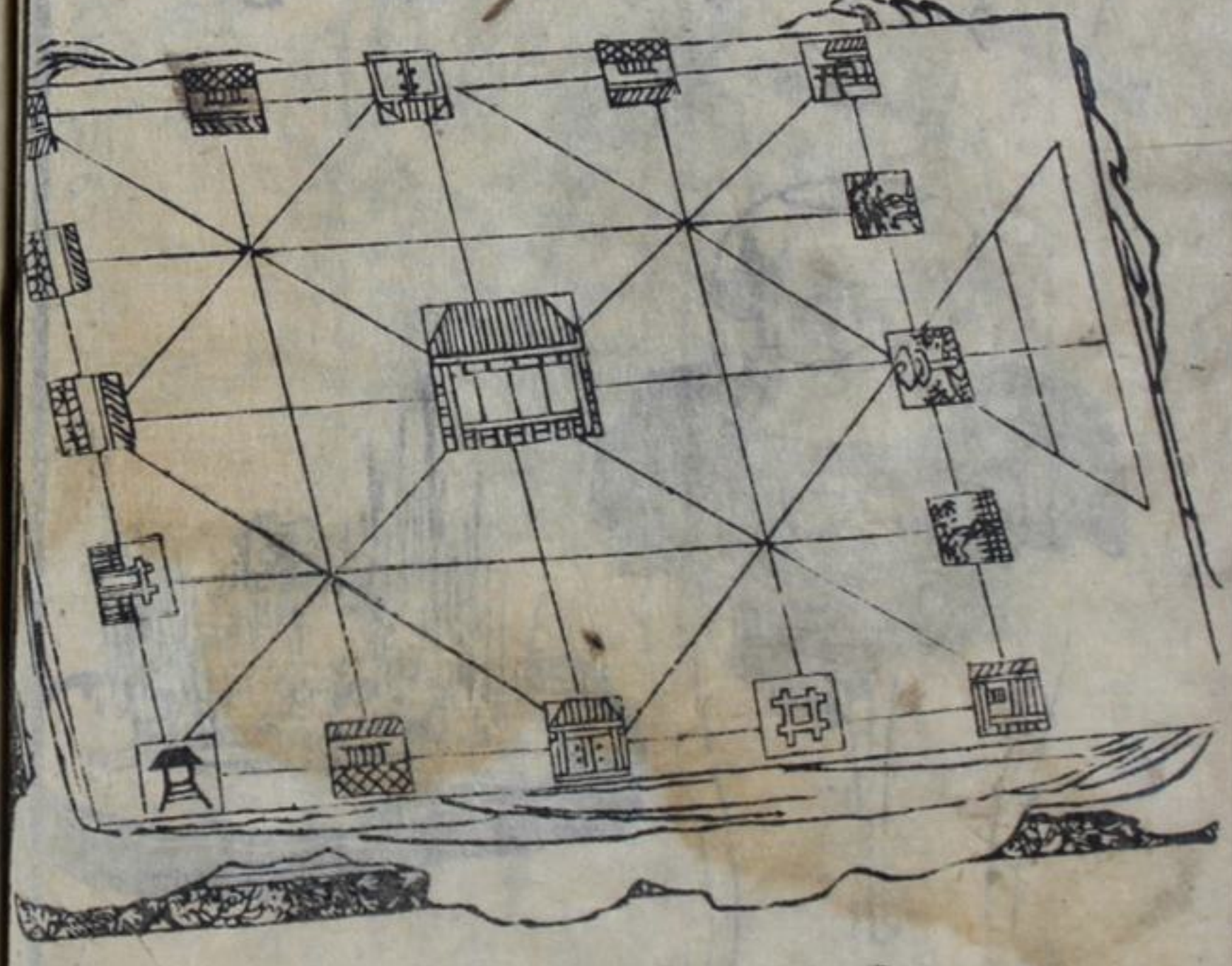
正面小致ひなりの入陸谷の  
 重宝金魚不快の玉と申  
 八貝葉原の市緑田わく  
 の赤のふれ玉をうけとらぬ  
 せりまきまらるく小むらあ  
 わるねが石燈の玉とやま

合意をかりて  
 甜りく





ちあるこ小登入ちあつらん  
 加古川本流杉五  
 日向舞の大星力海人  
 新の島のむきりの後集まり  
 ひとまき力泳年十ちあつらん  
 少人世に十六むきりのいそあん  
 四十七人の浪人を南有るあつらん  
 乱入してはの小登入ちあつらん  
 ちあつらんを後代にむきり  
 この後集まりの山徳あり



これ ちあつらん ちあつらん ちあつらん  
 出現ありむとの真の屋敷の  
 ちあつらん ちあつらん ちあつらん  
 ちあつらん ちあつらん ちあつらん

一 ちあつらん ちあつらん ちあつらん  
 ちあつらん ちあつらん ちあつらん  
 ちあつらん ちあつらん ちあつらん



ちあつらん ちあつらん ちあつらん  
 ちあつらん ちあつらん ちあつらん  
 ちあつらん ちあつらん ちあつらん

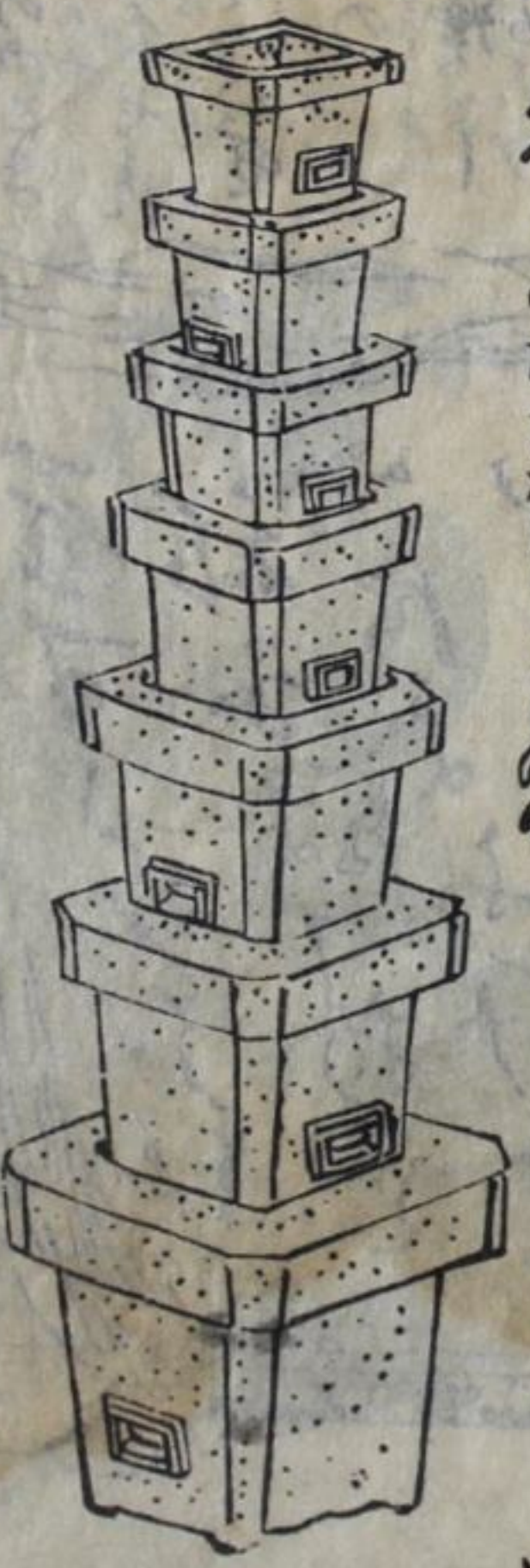


# 大盤若面經一卷

是より先皇... 寛文の御山  
 天皇寺金葉子上人より世に傳へて...  
 上人五世の什宝堂...  
 神尚の所... 御座...  
 宝物あり...  
 全... の...  
 ... の...



是より石塔婆... 侍大将... 源の義経...  
 ... と... の... の...  
 七輪の塔あり...  
 ... の...



地... 七...  
 ... の...  
 ... の...







是に於て年々増え入る人皇十二代 聖仁帝の御まゝに御くまをせりすと  
 志のまをせぬのえありし 四十八年の御像よりかひの御まゝに御くまをせりすと  
 一の御像とせらるるをそのとせせいとくらまはるる御まゝの御くまをせりすと



福野川  
 経家廟

浦人松凡のおねひまゝに隅田川の粗女伝志のめりかひの御まゝに御くまをせりすと  
 おのれ我妻にふまひの御まゝに御くまをせりすと  
 意のふまゝに御くまをせりすと  
 意のふまゝに御くまをせりすと

この世の御まゝに御くまをせりすと

豊後國 富永山豊前寺の本尊





今より四十九年の  
 昔天明八戌申年  
 同日文谷の  
 仁王尊大利益  
 わりて糸緒の人群集せり  
 其手に雲州より出  
 関取小九紋籠

上

清大夫といふ人の文七人の子重さ  
 甲子年用室を改元己酉年大関と  
 前代未聞の男ありて彼を  
 取合せて高築  
 小伝ふ



碑文谷仁王尊文畫略録記

拵佛法守護の仁王尊といふを辱るも大佛渡の一文ありて二文と  
 別仁王と現ト二文の族細小佳七四文谷の五文番とあるせり  
 故小六文の光岸とて好ト七文の清伝を供ト八文成かざり





八日紙張日とて九文紙が如く裸  
 めてはの五十五文の巾着袋土文の鞋  
 由て御足にあらはれとの巾着袋  
 仍て十五文の巾着袋を巾着とす  
 賽後小よて拜申す

林屋正藏作  
 五雲亭貞秀画



箒勘責之鑑

これ 是るる 此種入元を  
 奉教拾方二千  
 二百六十石七升八分  
 九合又夕奉のそのしじ  
 閑年奉申源の  
 義経公の御履  
 糸井の女奉申の



是利きくくが



成田屋武道妙王



浦川の...  
 天保七...  
 申年...  
 成

其の後...  
 天...  
 五...  
 相...  
 八...  
 九...  
 一...  
 九...  
 七...  
 七...  
 七...



是の安藤一なるも成田山不動明王と一様分る  
りて成田屋武道妙王と十尊まつる則此類の髪受を  
頂き右の市子より市川代々の大太刀でのをまひたり此子  
より徳福ぬを妙の法をもそ青万治之庚子の年元祖  
市川七半上人親の昇家龍門の遊一終り眠るもる  
甚財は差申に不動の慈悲と蝙蝠紙傘の口元細くとも  
未廣かりれ子孫とまげ後牡丹花の益貴ありて世の  
世活るハハ○ぬぬ修習所志のどく賛ふハ腹の  
まを長命長寿子孫連続と相結るる一ハ鼻の

ひくき者の高くる一眼の志をわく一ハるも一ツあらめめ  
ちまくる一ハ口のすじらぬも小田原外郎の奇特もて疾  
おほぐたぎ一ハをたむけむと取り出ハ一柔弱なる人も  
一ハゆるめが替くのうち小意来の法と物とあり助六  
ハおろく願を志めるる既痛やとも樂をよて  
まらまらとせんとの由誓願のむのよの  
此方のま時八代のま十希とんぐりと  
此洋わくまを





マそんるまひ子食の上はとまのてほのめりごとかひののうこれゆりんとも  
 りがまとんを由鬼ちの相かるけんその相持ひをゆりあり大江山  
 鬼の居接く新衣面童子ハ定り四ッ切と美至の門へけわんど  
 そまへく上使ハまのきろねたいこうまぬいせひゆるしれ肩を同きりそり  
 うさりの南枝の梅が香や花の良又せ東風が揚町うらまき屋所  
 みる年ふりせの度りたしりそびと江島子之田を後小あらす後  
 丑のく細おね小ニサッごらひのきであひふ日よりふきこて童子衣  
 屋の度がしらま鬼もあさんかんやさうかこのんやゆん

作者曰  
 此文向ハ廿二年むくのせりぬゆをきめて吉好の  
 世方の世ぞんとあさんや再々あ字を















不破谷古屋の衣將衣



羽生村寺在門所持の火打鎌

子子子子子子子子子子

子子子子子の潮まね  
こころをゆ  
ねこ  
子子子子子子子子子子  
ま  
後子まあ  
ねのこを洋わ













国文  
24L  
43



美  
五  
香

林屋正藏作  
五雲亭貞秀画



